巻頭言

プログラム実施にあたって

宮　﨑　　聡
〈国立天文台ハワイ観測所　650 N Aohoku Pl. Hilo HI96720〉
e-mail: satoshi@naoj.org

ハワイ観測所では，2023年後期（S23B）の観測プロポーザル受付より，大学院生が筆頭提案者（PI）のプロポーザルについて，それが採択された場合には，ハワイ現地での観測旅費を支出する，というプログラムを導入しました．これは大学の先生方からの要望を受けたものでした（東北大学の児玉先生の記事を参照）．幸い多くの応募があり，S26A期までに84件の学生PIプロポーザルが採択され，これまでに延べ28人（重なりを除いた実人数は21名）の大学院生に，実際の観測を経験していただいています．

私達がこのプログラムを実現したいと思ったのは，学生の皆さんに，観測データがどのような過程を経て取得されているのかを，実際に経験していただきたかったからです．遠方より飛来したひとつひとつの光子が，どれだけ多くの人々の努力の結果，データとして記録されているのかを知っていただきたかったからです．また，観測そのものも，天候不良等が原因で，いつも成功するわけではありません．そのように苦労して取得したデータは，多少不完全でも切り捨てることをせず，何とか研究成果を出そうと工夫してくれるでしょう．また，何か新しい発見は，信号かノイズかギリギリのところで見つかるはずで，そのような工夫をした経験がないと，チャンスを見逃してしまいます．さらには，データがどのように記録されるかという過程をありありと理解できた人は，観測装置に足りていない機能は何か，さらに観測効率を上げるためにはどうしたらよいかと考え始めて，新しい観測装置を着想する人が出てきてくれるかもしれません．

それから，私達には，大学院生の人達に天体観測を実施する観測所という現場を見ていただきたいという希望もありました．そこで働く人々が，どのようなやりがいを持ち，何を面白いと思って仕事をしているのかということは，数字の羅列であるデータを見ているだけでは，なかなか想像できないと思います．「観測」は，自然科学の方法の中で一過程にすぎないのですが，そこにどのくらいの労力と情熱が込められているのかを知ってほしかったのです．

このような数々の期待を持って，学生PIプログラムを実行しようと所内で調整を始めたところ，おどろくほど多くの支持を得ることができました．とりわけ，観測者が来るとなると対応のための業務量が増えるであろうサポートアストロノマーの方々の反応を心配していましたが，全く取り越し苦労で，逆に強い支持をいただきました．観測者のハワイ島内での滞在についても，事務職員の方々が借り上げ宿舎を確保してくださるなど，経費を圧縮するための工夫をしてくださいました．とはいえ，プログラム実施にあたってはハワイ観測所予算から費用を捻出しているわけで，ハワイ・三鷹の職員の皆様には趣旨をご理解いただきながらも，少しずつ不便を我慢してもらっているのは事実です．心より感謝申し上げます．

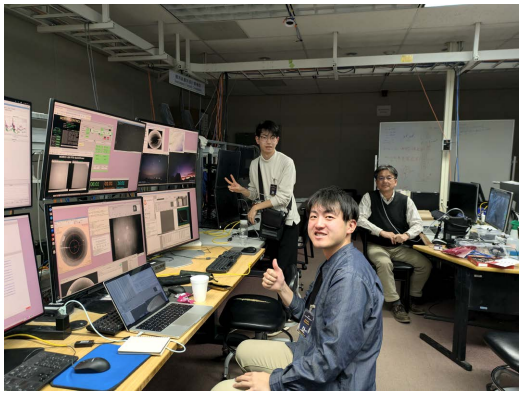

図1　プログラムの利用者によるマウナケア山頂の観測室での一コマ．手前：PIの高橋宏典氏（東北大学大学院D1），後方左：萩原颯氏（東北大学大学院M1）後方右：兒玉忠恭教授（東北大学大学院）．

図2　プログラムでハワイに来訪した学生によるセミナーの様子（埼玉大学の金井昂大氏）．

さて，プログラムを実施し始めてから3年あまりが経ちました．実施前まで，すばる観測提案数は年々微減傾向にありましたが，導入後，見事にV字回復に転じました．学生の皆さんがバリバリ提案書を書いてくださったおかげです．それぞれの指導教員の方々の勧めや助言も多くあったのだと思います．ありがとうございます．観測を終えた学生さんには，可能であれば観測所にしばらく滞在して，データ解析の打ち合わせや研究紹介セミナーを行っていただくことをお願いしていました．それが実行され，観測所職員と研究交流している機会を見ることも多くなってきました．今後もこのプログラムが続き，私達が期待したことが少しずつ実現することを願っています．

なお，本特集はプログラム開始の最初の2年（S23BからS25Aまで）の学生さん達に執筆を依頼しました．それ以降に来訪観測を行った学生さん達も，観測結果が出たらぜひ同様の体験記事を月報に投稿していただき，さらに若い人たちにその経験を伝えてくださるとうれしいです．

Student PI Program

Satoshi Miyazaki
Subaru Telescope, NAOJ, 650 N Aohoku Pl. Hilo HI96720

Abstract: Aimes of the introduction of Subaru Student PI program that enables their on-site observations are argued.